

## 1. 退職後活躍されているシビルエンジニアに話を伺いました

当小委員会では、退職後も生き生きと活動しているシニアのシビルエンジニアの方に、これまでの生い立ち、各年代においての考え方や行動の変化などをお伺いし、それらをまとめたインタビュー記事を公開していくことを企画した。インタビューの対象者には、身近な先輩を選定し、平成27年（2015年）4月現在12名分をHPに公開している。公開数が一定以上になったため、10回刻みにインタビュー対象者の含蓄のある言葉、考え方、行動や提言等を取りまとめることとした。本稿は、第1回から10回を対象として取りまとめた。

本稿で対象とした10名の現役時代の職業は、国家公務員、地方公務員、建設業、建設コンサルタントが各2名、メーカー、鉄道会社が各1名であった。一方現職は、現役企業の継続勤務、公益法人、NPO等が各2名、人材マネジメント会社、人材派遣会社経営、公益企業、任期付職員（震災地の町役場）が各1名と多種多様であり、このうち女性は1名であった。

## 2. シビルエンジニアが退職後も輝くために

現在も活躍を続けるシニアの方々のお話のなかで、現役世代のシビルエンジニアへのアドバイスや参考となるご意見を多数拝聴することができた。

### (1) 定年退職前に身に付けておくべきスキル・経験等

シビルエンジニアとしての確固たる技術力の習得、退職後に社外で客観的に技量を認めもらうという観点で、資格や学位等の取得についての言及がやはり最も多かった。また将来の活動の場を拓げるための学会活動や地域活動等を通じたネットワークや人脈づくりの重要性についても多くの意見があった。興味深いところでは、読書や趣味、遊びといった土木分野とは直接関係のない事柄についてもその必要性を訴える意見が複数あり、退職前と違った仕事を始める上での大きな力となっていることが窺えた。

### (2) 定年退職後の仕事を選んだ理由

現職の継続や海外人材会社における技術者の育成、高齢社会におけるベテランのシビルエンジニア活用を目指した派遣会社起業といった、社会・業界における人的資源分野での貢献を目指すという方、講演や漫談、イベント等の実施を通じて世の中に土木の魅力・必要性を伝えたいという方、自治体の運営支援や構造物の管理基準の策定、震災地域の復興といった行政あるいはそれに近い立場で社会に貢献したいという方等々、様々な理由があるものの、きっかけとして「それまでの経験を活かしつつ違った仕事をしたかったから」という意見が多かった。

### (3) これから定年退職を迎えるシビルエンジニア等へのメッセージ

- ・技術の真髄がわからなければお客様を説得できない。技術士やコンクリート診断士ぐらいは最低限必要。（第1回：松淵 得郎氏）
- ・日頃から多面的に興味を持ちネットワークを広げていろいろ実践するよう心掛ければ、定年後の人生を演出・エンジョイできる。（第2回：加藤 欣一氏）
- ・退職後は好きなことしか長続きしない。日頃から、自分の好きなことを客観的に把握しておく

ことが大切。(第3回：藤田 俊英氏)

- ・定年退職を迎える年齢までに、外部に認められる技能や能力を持たないといけない。定年退職を迎えても必要とされる人材になって欲しい。(第4回：高木 千太郎氏)
- ・基本的に人を育てることは出来ない。個人の意志の問題。パブリックの概念を持って欲しい。自らが関わる構造物の社会的な背景や地域特性に目を向けて欲しい。(第5回：佐伯 光昭氏)
- ・早めに退職後どうするかを決める。自分自身のスキルアップを図るだけでなく、資格など将来の活動に必要なものを身に付けることが必要。(第6回：正木 啓子氏)
- ・退職後に市民活動を行おうと思っても、きっかけがない。在職中から、講座や講習会などで地域とのつながりをつくっておくことが大切。また、人に自慢できる趣味を持つ。

(第7回：岩本 樹雄氏)

- ・現役時代に必ず作っておくべき事は、信頼関係の厚み。「資格」だけでなく、人と人との関係を築いていけるかがとても重要。(第8回：青山 勇夫氏)
- ・若い土木技術者の減少に対して、老朽化対策等で土木技術者ニーズは高まる。「60才定年で終わり」ではなく、現役時代をより長く考えることが大事。(第9回：齋藤 源氏)
- ・土木屋は一つの分野のスペシャリストというのも大事だけど、本来はジェネラリストであるべき。常に物事の根本に遡って見つめようとする姿勢、自ら考える癖が大事。

(第10回：尾田 栄章氏)

### 3. シニアエンジニアからの社会・業界等への提言

シニアの方々からは、シビルエンジニアに対するメッセージだけでなく、現在の社会・業界等への提言となる意見も多数あった。

- ・現在は(モノが)あって使えて当たり前の時代。(土木業界は)造る側から使う側の立場に立った説明、意識の切り替えが必要
- ・益々ニーズが高まる維持管理の仕事をシステムとして継続させていくためには、学生や若者への更なるアピールや、適正な報酬体系の整備が必要
- ・地震国である日本における、土木構造物の振動計測体制構築と、分野を跨いで統一した地震動で設計出来る仕組み作りが必要
- ・土木関係者は自らの仕事の意義を世間へ説明することが不足しているのではないか
- ・行政の現役技術者のために公共事業の過去の経緯等がわかる問い合わせ窓口を設置し、継続的に温故知新が可能な仕組みを作りたい
- ・フルタイムやパートタイム等、様々な就業ニーズを持つシニア世代がもっと労働意欲を高められるよう、年金制度や健康保険等の社会保険関係の法整備をすべき
- ・公物管理における関係者の意見反映ができる法体系の整備
- ・人口の少ない市町村レベルの職員は県・郡全体で採用し、災害時の迅速な協力体制構築や職員同士の競争意識が働くようなシステムとすべき

### 4. シビルエンジニアとしての成長のために

本企画は、定年退職後に輝くためには、現役時代からノウハウやスキルを身につける必要があるという観点から、読者層として40歳代、50歳代を想定している。

この年代において定年退職を迎える前の準備のみならず、幅広い世代でシビルエンジニアとしての成長のためのヒントとなれば、幸いである。

(文責：三嶋 信広、菊地 良範)